

IAAL

Institute for Assistance of Academic Libraries

ニュースレター

アイアールニュースレター

【特集】 大学図書館の
読書支援活動

APR. 2012

No.10



大学図書館の新しいミッション

立教学院本部調査役／東京大学名誉教授 寺崎昌男

志 願者の全入，学生の変貌，研究の高度化，そしてIT化とグローバル化。激変する環境のもとで，図書館への期待も大きく変わりつつある。大学図書館は法的には「附属図書館」である。国立大学法人や学校法人が附属的に設ける施設，という意味であろう。だが今や「附属」などというものでは済まない。大学総体の「中核」でなければならなくなってきた。重要なのは「学習を支援する」という使命である。

30年近く前，東京大学附属図書館のニュースレターに次のように書いた。

「大学図書館という場と機能とは，学生たちが『学問の志』を回復するための不可欠の機会である。私の経験から言っても，学問することの意味を自分との関わりの中に発見した学生は，たとえ一年生であろうと四年生であろうと，見違えるように本を読み始める。彼等は，がぜん図書館の意味を悟るようになる。『参考掛の人に聞いたんですけど・・・』などと言って，たびたび論文指導を受けに来るようになる」。

このところ産業界はじめいろいろな方面から「学生たちには『志』が不可欠だ，でもそれが足りない」と批判される。教員の中にも，学生たちの受身の学習姿勢に悩み，学習意欲の重要性を説く人は多い。しかし「志」や「意欲」は，学生たち自身がいま学んでいる学問との関わりを通じて発見し磨き上げていくものである。学問というものが実は自分と深く関わっていること，本気でやると面白く，感動が生まれ，しかも奥深いものだということに

気づいた学生は，図書館を利用するようになる。先の文章を書いたとき頭にあったのは東大や立教大の学生たちだった。その後30年にも色々な大学の学生たちに接してきた。「勉強」の意義が分かったとき，学生たちはみな変化を見せる。そのことは偏差値の高低などとは関わりない，というのが実感である。

もちろん現代の学生たちが図書館でフォローするのは本や雑誌だけではない。ウェブ情報でありビデオやDVDなどの視聴覚資料でもある。要するに紙媒体に制約されず，多種多様なメディアを通じて，学生たちは知識や情報を求める。しかしその場所が主に図書館である点は，昔も今も変わらない。

さらに現在図書館に求められているもう一つのミッションは，学習の空間を提供することである。ラーニングコモンズ，セミナーコーナー，ディスカッションルームといったさまざまな名前で図書館を再編成しようと試みる大学も，各地で増えてきた。学長主唱のもとにこれを大学改革の中心に据える大学もある。そうなれば，図書館が果たしうる機能は単に学習「支援」ではない。学習「センター」である。

大学にはもう一つの要請も投げかけられている。「学生たちを知識の受け手ではなく学習の主体，知の創造者に育ててほしい」というニーズである。学士課程教育や大学院教育の質的変革が進めば，図書館もこうした本質的に重要な要請に応える，肝心の場所になっていくだろう。

NACSIS Webcat から CiNii Books へ

国立情報学研究所（NII）は、2011年11月に「CiNii（サイニィ）」のリニューアルを行い、「CiNii Books」の提供を開始しました。CiNii Books は2012年度末に終了予定のNACSIS Webcatの後継サービスとして位置づけられています。NACSIS Webcatの終了、そしてCiNii Booksへの移行というニュースに驚かれた方がいらっしゃるかもしれませんが、本稿ではその背景や展望について述べたいと思います。

NACSIS Webcatは1997年から提供されており、多くの図書館員に親しまれてきたウェブサービスです。一方で、この十数年の間にウェブの一般利用者が急速に増加しました。検索エンジン、Eコマース、ソーシャルメディア…とウェブの可能性が広がり、また各サービスの機能が向上していく中で、学術情報サービスにおいてもユーザーが求める水準が非常に高くなっているのが現状です。このような背景のもと、NACSIS Webcatも図書館員と利用者がともに満足できるように発展を続けなければなりません。長年に渡る運用の結果システムが複雑化しており、抜本的な改善を行うためのコスト負担が難しいという問題がありました。

大学図書館コミュニティの動きとしては、2009年に「次世代目録所在情報サービスの在り方について」と題する報告書がまとめられました。報告の内容は、NACSIS-CATの電子情報資源への対応やデータ構造の再検討、運用体制の見直しなど多岐に渡りますが、その中で外部サービスとの連携の必要性について触れられており、データ公開

によって連携を実現すべきであるという提案がなされています。NIIではこの報告に基づき、NACSIS-CATのデータを積極的に活用するためのシステムの検討を行ってきました。

2009年はCiNiiが大きな変化を遂げた年でもあります。研究者・学生だけでなく一般ユーザーの利用を視野に入れ、ユーザーインターフェイスの刷新、各種検索エンジンとの連携、データ公開など、論文情報の普及に力を入れた結果、アクセス数は従来の3倍以上に増加しました。

これらの流れの中で誕生したのがCiNii Booksです。CiNiiの方法論をNACSIS-CATの書誌データに適用することで、一般の利用者にも使い勝手のよいサービスを提供することを目標としました。サービスの名称やユーザーインターフェイスについてはさまざまな議論がありましたが、すでに数十万人が利用しているCiNiiに極力近づけることでユーザーの学習コストをできるだけ下げることが最優先にしました。また、最新の開発技術を用いて小規模なシステムで動作することを心がけ、運用コストを低減させています。

検索項目はNACSIS Webcatの7項目から17項目に増加させ、これまではNACSIS-CATの業務システムでしか利用できなかった検索機能の一部を誰でも利用できるようにしました。また、館ごとの絞り込みや地域による絞り込みを備えており、個別の図書館・機関が所蔵している文献だけを取り出すことができます。書誌のページからは各館の

大向 一輝

国立情報学研究所



OPACへ直接リンクする機能を提供し、OPACの利用を促進しています。また、国立国会図書館サーチやカーリル、Worldcatへのリンク機能を備えるなど、国内外の図書館との連携を深めています。

開 発の最中には2011年3月11日の東日本大震災が起きました。その後の計画停電により、NIIが提供するサービスのほぼすべてが断続的な運転を余儀なくされ、多くの方々にご迷惑をおかけすることになりました。CiNii Booksでは小型・軽量化によって柔軟な運用が可能になり、同様の事態が起こった際にもサービスを継続することができるような設計になっています。

こ のような設計は開発のスピードを速めることにもつながっています。2011年11月の公開時には分類検索機能に一部不備があり、お叱りを受

けましたが、数日後には問題を解消することができました。また、当初はフルタイトル検索に相当する機能がありませんでしたが、公開3ヶ月後の2012年2月にこの機能の提供を開始しました。NIIに直接お寄せいただくご意見・ご要望だけでなく、ブログやTwitterといったソーシャルメディアでの言及を常時チェックし、開発に活かすという体制を組んでいますので、さらなる発展のためにご意見・ご提案をお聞かせいただければ幸いです。

今 後の知識社会において、学術情報の価値・必要性はますます高まっています。国立情報学研究所では、継続的なサービス向上に努め、よりよい社会の実現に貢献していきたいと考えています。また、その過程で長年に渡って作られてきたNACSIS-CATの情報の価値をより多くの人々に知ってもらえることができればと思います。

大学図書館が行う 読書支援活動

— 図書館からの情報発信強化 —

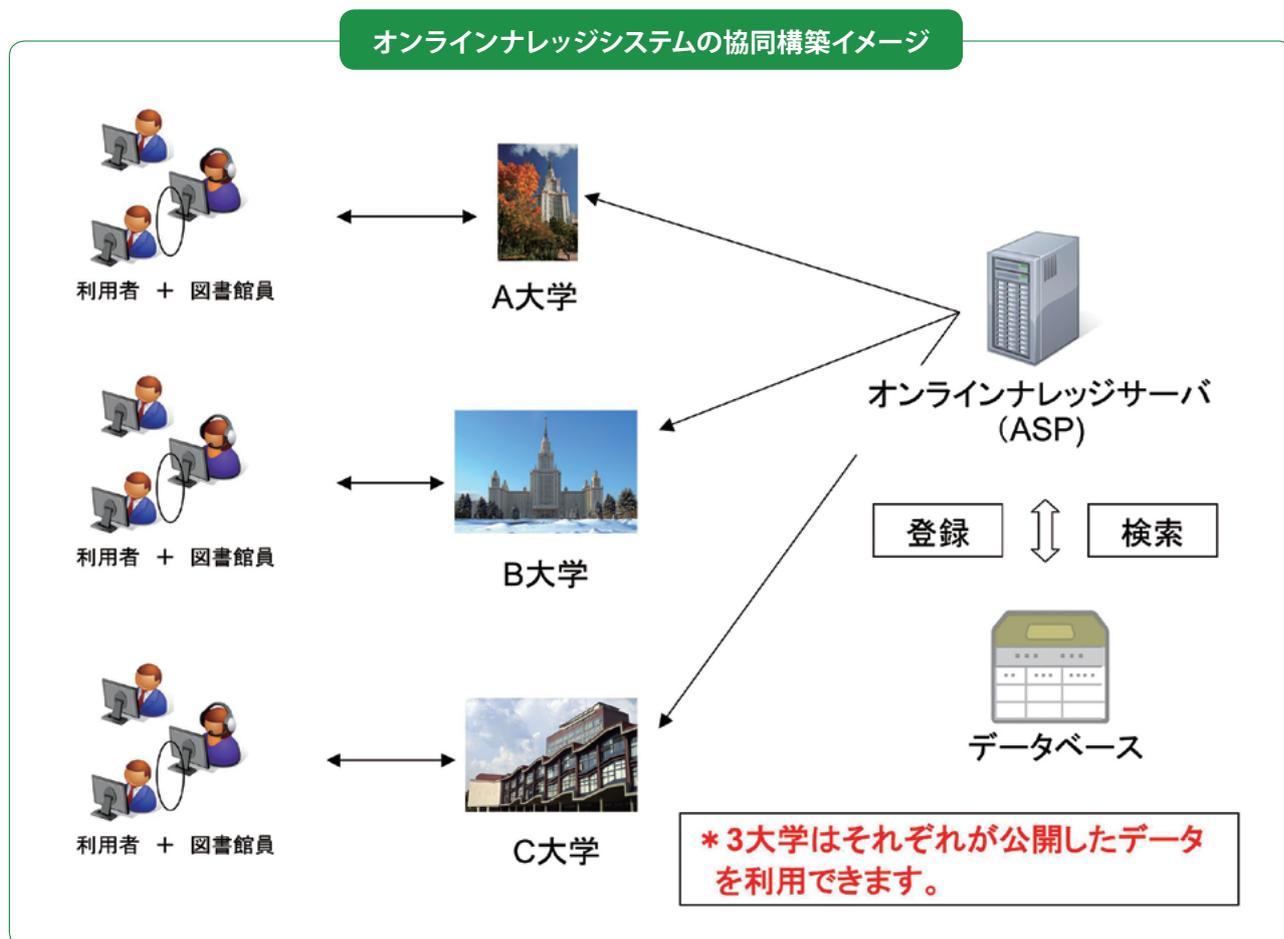
資料検索から、読書支援へ

図書館に求められる読書支援活動とはどのようなものでしょうか？図書館は、目録検索システムやレファレンスサービスを通じて、利用者の読書活動を支援しています。ですがこれらは、どちらかと言えば、検索支援としての役割が中心です。目録検索システムは、本の配置場所を探すことには長けていますが、何を読めばよいか、何を読むべきかに迷っている利用者にとっては、満足できる仕組みではないのかもしれません。利用者の更なるニーズに応えるためには、本を選ぶための情報の発信が必要であり、

これが図書館に期待されている読書支援に繋がっていくのではないのでしょうか。すでにインターネットサイトや書店では、本を選ぶための情報をさまざまな方式で発信しています。

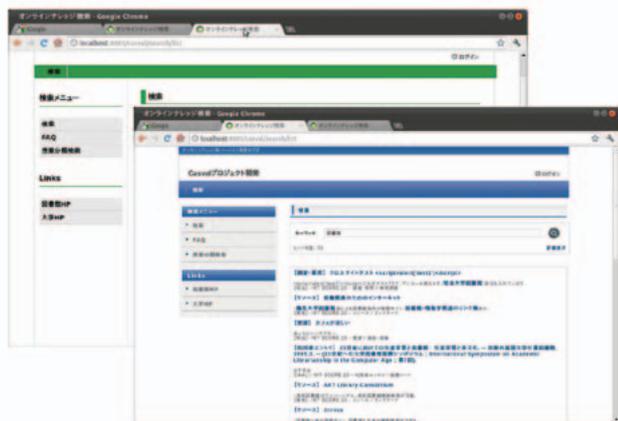
情報発信といっても、従来の仕組みとは異なった機能や特性が必要になるはずです。従来型の機能（HPや目録検索システム）を継続しつつも、図書館と利用者をより直接的に繋ぎ、かつ利用者自身も情報を発信できる機能を有する仕組みが必要です。

オンラインナレッジシステムは、そのすべての機能を有しています。





ユーザーレビューとOPAC連携
(事例：明治大学図書館)



オンラインナレッジ新インターフェイス

オンラインナレッジシステムと読書ノート機能

オンラインナレッジシステムとは、明治大学が開発しIAALが運用を委託されている協同利用型のオンラインレファレンスを中心とした情報発信システムです。利用はASP(Application Service Provider)形式ですので、ハードウェアの準備等は一切必要なく、比較的容易に導入することができます。(但し、認証処理を行いますので、図書館システム等の大学の認証を行うシステムとの連携が必要となります)。

オンラインナレッジシステムは、利用者の読書活動を支援するための読書ノート機能を実装しています。この機能では、利用者自身が読書履歴を管理することができるばかりではなく、目録検索システムと連携してレビューを作成・公開したり、本の評価をすることもできます。作成した読書記録は、Excelでダウンロード可能であり、読書履歴をそのままレポートや卒論の参考文献リストとして再利用することも可能です。

このほかにも、オンラインナレッジシステムには、オンラインレファレンス機能やFAQ作成、資料紹介機能など、図書館の情報発信をアシストする様々

な機能が実装されています。なお、現在は、インターフェイスを一新した新バージョンを開発中です。

どうやって、情報を集めるか？

資料レビューや資料案内など、目録情報以外の情報発信機能を持つ図書館システムは増えてきましたが、このような情報発信システム運用の最大の課題は、どのようにして利用者により多くのエントリーをしてもらうか、どのようにしてより多くの情報を収集・発信するかということではないでしょうか。有用な情報はより多くの有用な情報を生み出します。しかし全くのゼロから情報を収集するのは非常に困難ですし、Amazonなどの既存の情報を活用することも技術的には、可能ですが、大学図書館としてはやや難しい側面があります。

オンラインナレッジシステムは、この問題に対して、データベースの共同利用というソリューションを提案しています。これはオンラインナレッジシステムを利用しているすべての大学が持つ情報を参加大学で共有することを可能にするものです。例えば、A大学の学生や図書館員が作成したレビューや資料紹介文が、B大学の目録検索システムから参照することが可能になります。このようにコンテンツを共同で活用することによって、より多くの情報を図書館利用者に提供することが可能となります。

当然、学内のみの情報として他大学へは非公開としたり等の管理を行うことも可能です。レビューだけではなく、オンラインナレッジシステムで蓄積されたその他の情報も同様に共有することが可能になるため、図書館からの情報発信が一層充実します。まさに、オンラインナレッジシステムとは、利用者 と図書館、そして図書館と図書館を結ぶための仕組みなのです。

お問合せ

オンラインナレッジシステムの導入をご検討いただける場合には、以下のことが可能です。

- テストIDによるデモサイトでの試用
- 導入を前提とした専用サイトの立ち上げ
- 専用サイトでの各種設定確認およびテスト公開

まずは、テストIDを発行いたしますので、お気軽にお声がけください。

メールでのお問い合わせについては、info@iaal.jpまでお願いいたします。

IAAL 大学図書館業務 実務能力認定試験

「総合目録 - 図書中級」第2回, 「総合目録 - 雑誌初級」第4回 実施報告

日時 2011年11月20日(日) 図書中級14:00-15:30(90分), 雑誌初級14:00-14:50(50分)

会場 東京-機械振興会館, 大阪-大阪府私学教育文化会館

出題 図書中級150問, 雑誌初級100問(図書中級, 雑誌初級ともマークシート方式)

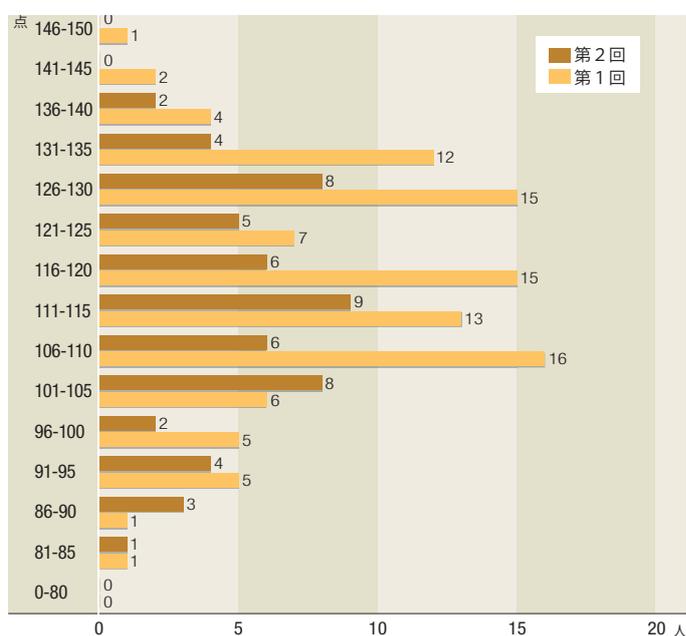
図書中級 第2回

第2回目の図書中級試験が実施されました。図書中級試験の受験資格は、当認定試験の図書初級に合格していることですが、出題される問題の難易度で初級・中級が分かれているわけではありません。初級は検索, 同定, 所蔵登録に関すること, 中級は書誌作成に関することを主な出題範囲としています。

また中級の問題は、非常に高度でレアな目録の知識を問うものではなく、書誌を作成するうえでの基礎知識を正確に把握できているかどうかを確認できる問題となっています。次ページに出題例を掲載していますので、ぜひこの問題にチャレンジしてみてください。

● 全体の得点分布 (第1回~第2回)

	第1回	第2回
最高得点	147点	137点
平均点	117.2点	113.4点
得点中央点	117点	114点
標準偏差	13.4	13.8



第1回, 第2回とも1問1点の150点満点で問題が構成されています。第1回と比べ最高得点も平均点もやや下がっていますが、合格ラインは第1回と同じ120点以上です。また前回と同様、わずかに合格点に達しなかった方が多くいることが平均点やグラフなどから読みとることができます。

● 問題の領域別正解率

領域	第1回	第2回	問題数
目録の基礎	78.1%	88.7%	30
書誌作成・和図書	87.9%	77.0%	42
総合・和図書	82.7%	81.0%	18
書誌作成・洋図書	64.8%	66.9%	40
総合・洋図書	71.9%	65.5%	20

図書中級でも、表にあるとおりの5領域を設けています。まず目録の基礎知識に関する30問, そして和図書と洋図書の問題をそれぞれ計60問ずつ出題しています。第2回も第1回と同じく、洋図書の正答率が和図書に比べ低いという結果になりました。次項のとおり、和図書と洋図書での経験年数に差があることが要因の一つと考えられます。

● NACSIS-CAT における書誌作成業務の経験年数

	第1回		第2回	
	和図書	洋図書	和図書	洋図書
①なし (主に検索, 所蔵登録のみ)	13 (12.6%)	26 (25.2%)	13 (22.8%)	16 (28.1%)
②1年未満	9 (8.7%)	7 (6.8%)	3 (5.3%)	8 (14.0%)
③2~3年	24 (23.3%)	26 (25.2%)	13 (22.8%)	16 (28.1%)
④4~9年	45 (43.7%)	37 (35.9%)	22 (38.6%)	16 (28.1%)
⑤10年以上	12 (11.7%)	7 (6.8%)	6 (10.5%)	1 (1.8%)

和図書と洋図書それぞれの、書誌作成業務の経験年数をまとめたものです。和図書では「④4-9年」、洋図書では「③2-3年」と「④4-9年」、そして「①なし」という方が多く受験されたことが分かります。

第1回と比べ、全体的に受験者の経験年数が少ない傾向がうかがえます。この試験は実務に即したものですので、これが第1回と比べたときの全体的な点数低下の要因とも考えられます。

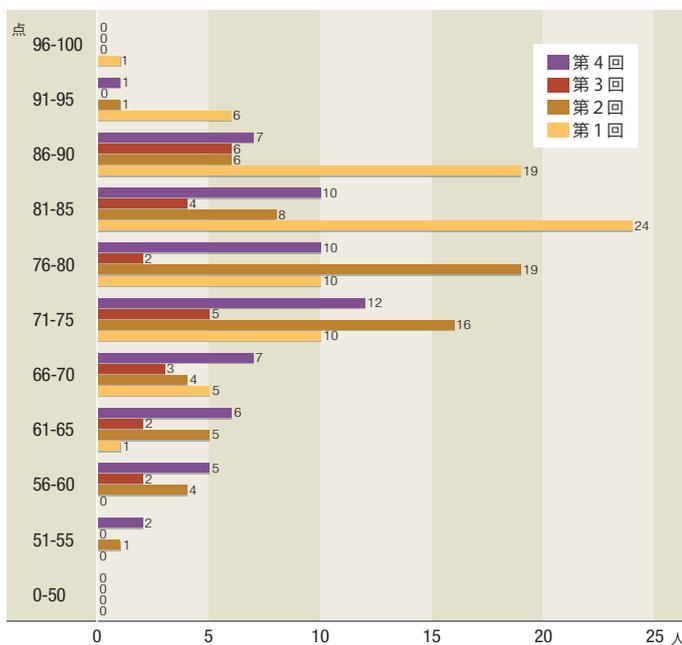
	図書中級 第2回	雑誌初級 第4回
応募者数	59名 (東京36名・大阪23名)	66名 (東京45名・大阪21名)
受験者数	58名 (東京35名・大阪23名)	60名 (東京41名・大阪19名)
合格者数	22名 (合格率37.9%)	18名 (合格率30.0%)



大阪試験会場

雑誌初級 第4回

● 全体の得点分布 (第1回～第4回)



	第1回	第2回	第3回	第4回
最高得点	97点	91点	89点	92点
平均点	82.1点	75.4点	76.3点	73.9点
得点中央点	84点	76.5点	76点	75点
標準偏差	7.07	8.61	9.39	10.0

全4回のうち、もっとも平均点が低い結果となりました。また合格率(80点以上の得点が合格)の割合も30.0%と低い結果となりました。

しかし雑誌初級についても、平均点とグラフなどから、合格まであと一歩という方が多かったことが分かります。

● 問題の領域別正解率

領域	第4回	問題数
総合目録の概要	78.0%	30
各レコードの特徴	78.7%	15
検索の仕組みと書誌の同定	73.9%	22
所蔵レコードの記入方法	65.4%	13
総合	69.6%	20

雑誌初級の問題構成は、表にある5領域のとおりです。

今回は「所蔵レコードの記入方法」と「総合」が低い結果となりました。「所蔵レコードの記入方法」は、雑誌所蔵レコードの具体的な記述方法について問うものです。雑誌目録そしてILL業務においては、この所蔵レコードの記述を正確に行うことが非常に重要ですので、この点をきちんと押さえておくことが大切です。

今回は2011年11月に行われた図書中級と雑誌初級の試験結果概要をお伝えしました。

図書中級の試験には、一昨年に行われた第1回の"リベンジ"という方も受験されていました。雑誌初級の試験は、前回の受験者数より大きく増え、東京と大阪で60名の方がこの試験にチャレンジされました。

このIAAL認定試験は、今後も継続して行っていく予定です。日々の図書館業務で蓄積された知識を試験という形で確認できる機会は、他にあまり無いと思っています。だからこそ、私たちは試行錯誤を重ねながらこの試験を育てていきたいと考えていますので、少しでも興味を持たれた方は、是非この試験に挑戦してみてください。

IAALのサイト内に、認定試験専用のページを設けています。認定試験のことについては、こちらのページをご覧ください。

▶ http://www.iaal.jp/IAAL_HPver5/index.html

IAAL 認定試験

検索

「総合目録 - 図書中級」 第2回

問題例集 <抜粋>

I. 目録の基礎

【問11】

入力レベル「必須2」の説明として、最も適切なものを選びなさい。

- ① 目録担当者は、適用可能な情報、又は容易に入手可能な情報が存在する場合、常にデータ記入を行う。
- ② 目録担当者は、自参加組織の方針に従って、データ記入を行う（又は行わない）。
- ③ 各参加組織は、目録登録業務方針として、データ記入を行うかどうかの選択を行う。
- ④ システムによる自動付与のため、目録担当者がデータ記入を行うことはない。

● 次の文章を読んで以下の問28に答えなさい。

主題ブロックは、標準的な書誌分類や件名等を記録する。主題ブロックは【a】とSHフィールドの2種類がある。

【問28】

【a】に入る最も適切なものを選びなさい。

- ① CWフィールド ② CLNフィールド
- ③ CLSフィールド ④ NOTEフィールド

II. 書誌作成・和図書

● 問39～43について、TRフィールドの記述の仕方として、正しい場合は①を、間違っている場合は②を選びなさい。

【問41】

標題紙裏は、TRフィールドのデータ要素の情報源である。

● 問61～63について、NOTEフィールドについて述べた文章のうち、正しい場合は①を、間違っている場合は②を選びなさい。

【問61】

NOTEフィールドが複数ある場合、NACSIS-CAT特有の事柄に関する注記は先頭のNOTEフィールドに記述する。

【問63】

内容細目をNOTEフィールドに記述するかCWフィールドに記述するかは、作成者の判断による。

III. 総合・和図書

● 図3-3の図書を検索した結果、総合目録データベースにはこの図書の第1巻にあたる書誌レコード（書誌3-3）しかないことが分かった。検討の結果、この書誌3-3を修正して図3-3の図書を登録することにした。

この修正について、問85～87に挙げるフィールドのうち、修正すべき箇所には①を、そのままで良い箇所には②を選びなさい。（ただしリンクフィールドのリンク先は正しいものとする。）

【問87】

PHYS

【問88】

ALフィールドの修正について、最も適切なものを選びなさい。

- ① 電子書籍推進協会のヨミだけを追加する。
- ② 電子書籍推進協会を標目形に持つ著者名典拠レコードを検索あるいは作成し、そのレコードとのリンクを形成する。
- ③ ①、②以外の修正を行う。

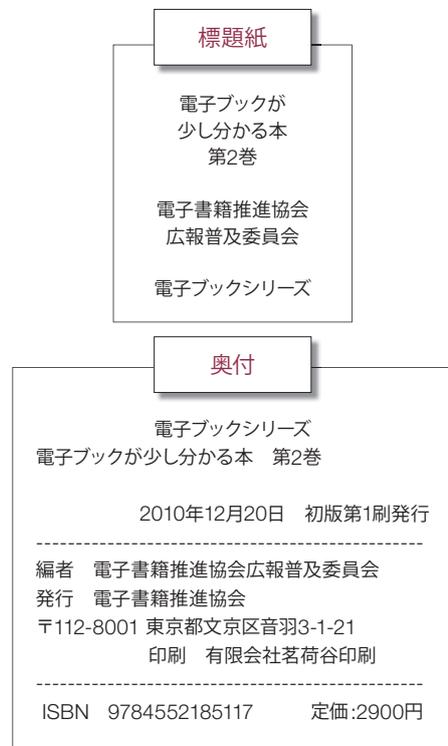


図 3-3

ページ付け : 8, 412ページ
縦の長さ : 25センチメートル
横の幅 : 20センチメートル

GMD: SMD: YEAR: 2010 CNTRY: ja TTL: jpn
 TXTL: jpn ORGL:
 ISSN: NBN: JP1001174 LCCN: NDLGN:
 REPRO: GPON: OTHN:
 VOL: 1 ISBN: 9784552183811 PRICE: 2800円
 XISBN:

TR: 電子ブックが少し分かる本 / 電子書籍推進協会広報普及委員会
 編||デンシ ブック ガ スコシ ワカル ホン
 PUB: 東京 : 電子書籍推進協会, 2010.11
 PHYS: 8, 395p ; 25cm
 PTBL: 電子ブックシリーズ||デンシ ブック シリーズ
 <BB00000751> //a
 AL: 電子書籍推進協会 < >
 NDLSH: 電子書籍 ||デンシショセキ//K
 NDLSH: 電子出版 ||デンシシュツパン//K

書誌 3-3

IV. 書誌作成・洋図書

【問114】

版について述べた文章のうち、最も適切なものを選びなさい。

- ① 装丁を表す語は, "paperback edition" のように版を表す語とともに表示されている場合は, EDフィールドに記述する。
- ② 付加的版表示はNOTEフィールドに記述する。
- ③ 表紙は, EDフィールドの情報源である。
- ④ 逐次的に刊行される資料に表示されている "2011 edition" は, EDフィールドに記述する。
- ⑤ 並列版表示の入力レベルは「必須2」である。

【問124】

著者名典拠レコードのHDNGフィールドの記述として、最も適切なものを選びなさい。

- ① Smith, John 1924-
- ② Smith, John, 1924-
- ③ Smith, John (1924-)
- ④ Smith, John, (1924-)

- 問126～130について、親書誌レコードについて述べた文章のうち、正しい場合は①を、間違っている場合は②を選びなさい。

【問126】

TXTLフィールドには、子書誌レコードの本文の言語コードを記入する。

V. 総合・洋図書

- 図5-1及び図5-2を見て、以下の問131～134に答えなさい。



図 5-1

図 5-2

【問132】

この図書について、PUBフィールドの出版地の記述として間違っているものを選びなさい。

- ① Berlin
- ② Berlin ; New York
- ③ Berlin ; New York ; Tokyo
- ④ New York

- 図5-3を見て、以下の問135～139に答えなさい。



図 5-3

(参考)

【問135】

問135. 図5-3の (ア) の部分を記述するフィールドとして、最も適切なものを選びなさい。

- ① VOL
- ② TR
- ③ ED
- ④ NOTE
- ⑤ PTBL

「総合目録 - 図書中級」

第2回

正解と解説

【問11】

正解：① 正答率：69.0%

入力レベルの「必須2」は、「目録担当者は、適用可能な情報、又は容易に入手可能な情報が存在する場合、常にデータ記入を行う。」です。間違えた方の大多数は③を選択されていますが、これは入力レベルが「選択」の説明です。「必須2」は、あくまでも必須ですので、常に入力する事が基本です。ただし、資料中に表示が無いなど、情報が無い場合に限って記入しなくても良い、というものです。同じ必須でも、「必須1」の場合は情報がなくても必ず記入しなければなりませんので、その点が「必須1」と「必須2」の相違になります。

なお、②も「選択」、④は「自動付与」の説明になります。(『CM』1.0.1E)

【問28】

正解：③ 正答率：81.0%

主題ブロックは、CLSフィールドとSHフィールドの2種類のフィールドで構成されています。これらは、目録対象資料の主題(及び形式)を記録するために設けられたフィールドで、CLSは、目録対象資料にかかわる分類標目を、特定の標準的分類表に基づいて記録するフィールドです。また、SHフィールドは、目録対象資料にかかわる件名標目、ディスクリプタ等を記録するために設けられたフィールドで、特定の標準的件名標目表、シソーラス等に基づいて記録します。(『CM』2.4)

【問41】

正解：① 正答率：67.2%

TRフィールドの情報源は、標題紙(標題紙裏を含む)、奥付、背、表紙です。

本タイトルを標題紙裏から採る事は、実際にはまず無いと思いますが、全集の編集者などが標題紙裏にしか記載されていない資料があります。この場合は標題紙裏の編集者をTRフィールドの責任表示として、補記の[]を付加する事なく記入する事ができます。(『CM』2.2.1E1)

【問61】

正解：① 正答率：60.3%

NOTEフィールドに記録する注記は、NACSIS-CATに特有なものと、目録規則で示されたものがあります。そしてNACSIS-CATに特有なものは目録規則で示されたその他の注記よりも先に記入することになっています。

この、NACSIS-CATに特有な注記には以下のものがあります。

ア) 資料の特性に関する事項(地図資料、楽譜など)

イ) 書誌レコードの分割に関する注記(VOLの繰り返しが255を超えるために1書誌レコードに記録しきれない場合など)

ウ) 中位の集合書誌単位に対応する版表示

エ) 複数の出版物理単位からなる書誌レコードの責任表示、出版者の変更に関する注記

オ) 記述の基盤についての注記(「記述は下巻による」「記述は第2刷(2000.3)による」など)

カ) 類似書誌レコードとの相違に関する注記

キ) 同一書誌レコードとして扱う資料間に見られる相違に関する注記

これら以外の、目録規則で示された注記は目録規則で示された順に記入していきます。(『CM』2.2.7)

【問63】

正解：② 正答率：70.7%

内容細目は原則として、NCRとは異なり、NOTEフィールドではなくCWフィールドに記入します。NOTEフィールドに記入するのは、「著作単位のタイトル、責任表示に該当しないか、あるいは検索の必要がないもの」に限られます。

これらの例としてCMでは、

NOTE:参考文献: p125 ~ 131

NOTE:フロイト年表・文献案内: p456 ~ 470

NOTE:昭和45年4月14日~5月24日、京都府立総合資料館で開催された「東寺百合文書展」の展示図録

NOTE:第1巻: 明治11年~明治20年. 第2巻: 明治21年~明治30年. 第3巻: ...

が挙げられていますのでご確認ください。(『CM』2.2.6F2)

【問87】

正解：① 正答率：93.1%

複数の出版物理単位からなる資料の場合、TRフィールドなどの情報源は、最初に刊行された資料(又は入手可能なもののうちの最初に刊行された資料)の所定の情報源です。しかしながらページ数については、「記述対象とする図書が2冊以上からなるときは冊数を記録」(『NCR』2.5.1.2E)します。

そのため、現在は「1」の資料に基づいて記述されている書誌に対して、「第2巻」も含めた形態情報を記述する必要があります。

修正内容は、この資料が第2巻で完結した事がわかっていたら、「PHYS:2冊; 25cm」となり、まだ継続する場合、もしくは完結したかどうか不明の場合は冊数は明記せず「PHYS:冊; 25cm」とします。

【問88】

正解：③ 正答率：58.6%

情報源に表示されている責任表示は「電子書籍推進協会広報普及委員会」です。従って、ALフィールドにも「電子書籍推進協会広報普及委員会」のように、内部組織まで含めた形を記録する必要があります。①も②もALフィールドの標目形は「電子書籍推進協会」という上位組織名だけですので、これらは不正解です。

最も適切な修正は、電子書籍推進協会広報普及委員会を標目形に持つ著者名典拠レコードを検索あるいは作成し、そのレコードとのリンクを形成する事ですので、③の「①、②以外の修正を行う。」が正解です。(『CM』9.2.1D1.4)

【問114】

正解：③ 正答率：79.3%

設問の選択肢について順に見ていきましょう。

- ①の装丁を表す語は、EDフィールドではなくVOLフィールドに記入します。(『CM』4.2.2H) 特に英米で刊行された洋図書の場合、ハードカバーやペーパーバックという装丁を表す語が表示されている資料が多いのですが、これらはVOLフィールドに記入します。従って×です。
- ②の付加的版表示というのは、「ある特定の版に対して変更が加えられ、再発行されたような場合に、その版に付加される版表示」(『CM』4.2.2D)の事です。この付加的版表示は、EDフィールドの版表示などに後ろに「,△」(カンマ、スペース)で続けて記入する事になっています。従ってこれも×。
- ③EDフィールドの情報源は、「タイトルページ、タイトルページの裏、表紙など、及び奥付」です。つまりこれが正解です。なお、表紙が情報源であるというのは意外に思われるかもしれませんが、EDフィールドの他にも、出版事項やシリーズ名も表紙が情報源に含まれます。
- ④“2011 edition” だけでしたら、EDフィールドに記録する事も考えられますが、問題文ではこれは「逐次的に刊行される資料に表示されている」と限定しています。このような、逐次的に刊行される年版などの語句はEDフィールドではなくVOLフィールドに記入する事になっています。(『CM』4.2.2H3.1) 従ってこれも×。
- ⑤並列版表示というのは、「版表示が2以上の言語又は2種類以上の文字で表示されている」ものです。(『CM』4.2.2D) 記録する場合はEDフィールドに、版表示などの後ろに「△=△」で続けて記入しますが、その入力レベルは「選択」ですので、これも×です。(『CM』4.2.2)

【問124】

正解：② 正答率：46.6%

洋資料を著している著者の著者名典拠レコードの場合、適用する目録規則は『Anglo American Cataloguing Rules. ver. 2』(以下『AACR2』)です。『AACR2』では標目形は、「姓,△名」(姓、カンマ、スペース、名)ですが、識別に必要であれば生没年を記入することができるようになっており、例示によると生年のみを記入する場合は「姓,△名,△生年-」となります。(『AACR2』22.17A)

【問126】

正解：② 正答率：65.5%

子書誌の場合はTXTLフィールドに本文の言語コードを記入しますが、親書誌の場合は原則として“und”を記入します。全集や分冊などのように、子書誌がすべて英語で書かれている事がわかっている場合でも、“eng”ではなく“und”になります。(『CM』付録1.3言語コード表)

なお、例外として、その親書誌がバランスしない書誌構造である場合は、VOLフィールドに記録された資料の本文に対する言語コードを記入します。

【問132】

正解：④ 正答率：36.2%

図のタイトルページに表示されている情報は、“Berlin New York Tokyo”です。この表示から出版地として記録する内容を考えてみますと、まず最初に表示されている地名である“Berlin”を記録します(選択肢の①)。次に、情報源上で強調されている地名も記録できますので、太字で表示されている“New York”を記録する事ができます。この場合はそれぞれの出版地を「△;△」でつなげます(②)。さらに、目録作成機関がある国の地名も記録する事ができます(③)。しかし、④の“New York”だけを記録する事はできません。(『AACR2』1.4C5)

【問135】

正解：⑤ 正答率：63.8%

(ア)の部分は、手元のタイトルページに表示されている、タイトルと責任表示と考えられる部分です。右側に示されている別の資料と合わせて見ますと、“tome premier (第1巻)”が“L'Antiquité (古代)”で、“tome deuxième (第2巻)”が“Moyen âge (中世)”である事がわかります。このうち、“tome premier”は巻次等であり固有のタイトルとはなりません。また、“L'Antiquité”も部編名であり、通常は固有のタイトルとはならないものです。ところがその下の(エ)の部分を見ますと、手元の“t. 1”の訳者は“Claude Yelnick”、“t. 2”の訳者は“Susan Wise”とそれぞれ異なっています。このように、部編名に対する責任表示が異なる場合は、その部編名を固有のタイトルと同様に書誌単位とします。

以上の事から、この資料を記述する書誌レコードの書誌構造は、下記ようになる事がわかります。

```
TR:L'Antiquité / traduit de l'anglais par Claude Yelnick
PTBL:Histoire du monde / par William Hardy McNeill
<BB99999999> t. 1er
```

つまり、図の(ア)の部分はPTBLフィールドに記述しますので、⑤が正解です。

本がつながる、みんながつながる
BOOK LINK が目指す図書館像：

「つながる」・「顔が見える」図書館に

九州大学附属図書館 井川友利子

九州大学は学生約19,000人、教職員約7,600人が在籍し、中央図書館だけで平日1日に約1,800人が来館する。日常業務だけではなかなか一人一人の学生を個として捉えることが難しく、「匿名の図書館員」と「匿名の学生」との間に距離を感じていた。

いまや図書館は学生にとって情報源の一選択肢でしかない。図書館に来ない学生は、来ない。それでも図書館に魅力を感じてもらい、選ばれる図書館になるにはどうすればよいか。

そこで目指しているのが、「つながる」・「顔が見える」図書館である。それを具現した企画のひとつとして、2011年9月より学生による本の紹介リレー「BookLink～本がつながる、みんながつながる～」⁽¹⁾を開始した。

BookLinkの仕組みはいたってシンプル。おすすめ図書の紹介者となる学生（Linkerと呼ぶ）に、次のLinkerを指名してもらい、友達の輪をたどりながら次々と図書を紹介してもらおうというものである（いわゆる「いいとも」方式）。紹介文にはプロフィール写真と自己紹介、次のLinkerの紹介も

入れ、紹介者の人となりが見えるようにしている。紹介されたおすすめ図書は図書館内に展示し、web本棚サービス「ブックログ」⁽²⁾に掲載する⁽³⁾。

開始当初はこれで本当に続けていけるのか一抹の不安はあったが、紹介が途切れることは

おすすめ図書紹介文



BookLinkホームページ

なく、展示コーナーも好評で多くの学生が足を止めて見ている。

紹介の頻度はそのときの学生の都合により、学祭や修論執筆などで間が空いてしまうこともあるが、目くじらを立てて提出期限に拘ることはなし、学生のペースに合わせてゆっくりと続けていくスタンスでいる。

紹介される図書については、やはり小説が多い。これを否定するわけではないが、様々なジャンルの図書を紹介してほしいという思いもあり、現在では大学院生や学部4年生がLinkerとなった場合は、「できれば、他専攻の学生も楽しめるような専門分野の図書」をお願いしている。この軌道修正による学生の反応が多少心配ではあったものの、例えばT.イーグルトンの『文学とは何か』がBookLinkの展示コーナーに置かれた時、すぐに貸出されており、予想以上の好評に驚いている。今後、様々な専攻の学生がLinkerとなって、他の学生の知的好奇心をかき



立てる図書を紹介してくれることを期待している。

図書館にあって、インターネットにないものは生身の人間同士のつながりである。しかも、学内でこれほど様々な学部の学生や教員が集まる場所は、図書館をおいて他にはない。

図書館が、書庫にあらす図書館たる所以はそこに人がいるからこそである。だからこそ、無機質なハコをイメージさせるような図書館ではなく、図書館を利用する学生同士が交流できる場所になったら。さらには、「図書館員の〇〇」個人として「〇学部の〇〇さん」にサービスするという形に少しでも近づけたら。

BookLinkの狙いは、図書とリアルな交友関係を媒介にして学生と学生、学生と図書館をつなぐことにある。図書館の隣席にいる学生の横顔を見せることで、紹介された図書も立体的に浮かび上がってくる。そうして見ず知らずの学生同士の化学反応を起こしたい。

図書館の中に人とのつながりを作ることで、利用する学生の視野が広がり学習の幅が広がる。そんな図書館を目指している。



館内での展示



ブックログ

紹介文を書いた学生から

Aさんからのメール

先日、「BookLink」の展示を拝見いたしました。ほとんどの本が借りられているのは、私たちの推薦文のおかげ、と調子に乗ってもよいのでしょうか（笑）続きの方々の紹介される本も楽しみです。展示場所がよいのか、1週間で多くの後輩から「あれ、先輩の文章ですよね?」と話しかけられました。自分の文章がたくさんの人に見られるというのは、少し恥ずかしいですが嬉しくもありますね。

Bさんのtwitter

“ 図書紹介リレー書いたー中央図書館に掲示されるから俺が完成したものを見ることはないだろうなw次は伊都を脱して芸工の後輩に回した!たのんだー! ”

紹介文を書いた学生の周囲の友人・知人に口コミやtwitterで伝播しています。小さな範囲かもしれませんが、BookLinkは、「知り合いが図書館で何かしているらしい」というところから、図書館に興味を持ってくれる人がじわじわと増えることを意図しています。

[参考]

(1) 九州大学附属図書館. BookLink～本がつながる、みんながつながる～ <http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/booklink/>

(2) 九州大学附属図書館. “booklinkの本棚”. ブックログ -web本棚サービス-. <http://booklog.jp/users/booklink>

(3) 実施に至る経緯等は、こちらを参照されたい。

国立国会図書館. “E1224 - 九州大学が開始した学生による本の紹介リレー “BookLink””. カレントアウェアネス・ポータル. <http://current.ndl.go.jp/e1224>

「それから」

～ブックステーションプラス～

今回、IAALニュースレター8号で取り上げた「ブックステーションプラス」を開発されたLCO株式会社へその後の経過と取り組みについてインタビューを行いました。

編集担当：LCOでは、このIAALニュースレター8号で取り上げたように、東日本大震災前に、地震の棚揺れによる書籍落下を防止するアタッチメント「ブックステーションプラス」を開発されましたね。

鈴木 (LCO)：そうです。図書館の書架の棚板は、メーカーによって長さや厚さが異なりますが、メーカー毎にカスタマイズして棚板を傾斜させる仕組みです。低コストで耐震性を備えることができます。実用新案を申請して、認可されていますので、東海地方の大学図書館から随分引き合いがきました。

編集：昨年の3月11日以後の図書館ではどのように変わりましたか？

鈴木：30館以上の図書館から問い合わせを頂き、お話を伺いました。いろいろな書籍落下防止用の機材を試したり、検討なさっている図書館が多いようです。ただ、地震で大量の落下図書があったことを考えると、利用者の安全確保のため、また、避難の時間を稼ぐためには、簡易でもよいから何らかの書籍落下防止用具が必要という声を多く伺いました。

編集：それでは、「ブックステーションプラス」は有効ということでしょうか。

鈴木：そうですね。でもこうした書籍落下防止用具導入の問題点も伺いました。書籍落下防止用具

に基準がなく図書館では判断が難しい、予算の制約があり、コストがかかると導入ができない、図書館以外の部署、特に経理部門ではこうした問題が認識されにくい、などといった意見がありました。

編集：確かに、書籍の落下は図書館特有です。今回は幸い、書籍落下による大きな事故はありませんでしたが、もし、大きな地震で人身事故が起きたなら、組織の管理を問われることになりかねませんね。

鈴木：幸い、「ブックステーションプラス」は、製薬企業研究所の図書館や、総合大学医学図書館で、導入されました。また、類似の用具も使われ始めています。実用新案を得ていることなど「ブックステーションプラス」を取り巻く事情をご存知の図書館も多いのは心強い限りです。

編集：その他に感じられていることはありますか。

鈴木：図書館を訪問して、多くの図書館員の方々が利用者の安全確保に強い思いをもっていらっしゃるがよくわかりました。また、自館の安全性だけでなく大震災後の大学図書館がこれから出来ることは何かを真摯に考えておられる方が実に多かったことに感銘をうけました。被災地への支援・寄付の新しい取り組みについても、落下防止用アイテムの話以上に熱が入ったことが幾度もありました。これからも、大学図書館で考えるべきことを共に考えるために各地の図書館様を訪問させていただくつもりです。



【設置事例】
東京大学医学図書館

前回に引き続き、書誌情報として記述があれば良いのに、と思うものを挙げていきます。

5) 原著の出版年

翻訳もの場合、原書名はVT:ORに記入されるのですが、その原著がいつ刊行されたものなのかという記述は無い事が多いようです。原著が出てすぐに翻訳されるものもありますが、何年か経った本が翻訳される事も少なくありません。比較的新しい資料を探している時には、原著の出版年があると参考になるのに、と思います。

6) NTSCとPAL

ここからは映像資料の記録についての話です。

このNTSCとかPALというのは、もともとはテレビの放送方式ですが、テレビにつないで再生するビデオやDVDにも関係しています。日本やアメリカ、韓国などではNTSC方式を、ヨーロッパではPALと呼ばれる方式を採用しています。これらは再生する機器が異なっていて、日本で一般的に流通している再生機器ではPALのものは再生できません。従って、少なくともPAL方式のものについては書誌情報として記録すべきではないかと思います。(なお、一部の再生機器では両方の方式に対応しているものもありますし、DVD-VIDEOに関して言えば、DVDを再生できるパソコンであれば、NTSCもPALもどちらも再生する事ができます。)

7) リージョンコード

これはDVDで導入されたコードで、ビデオにはありません。日本とヨーロッパは2、アメリカは1です。再生できる地域を制限する目的であるため、パソコンで再生する場合にも制限があります。パソコン(厳密にはDVDドライブ)では再生するコードを変更する事ができるようになっているものもありますが、変更する回数には制限があります。つまり、NTSC/PALとは異なり、リージョンコードが異なる場合はパソコンでも基本的に再生ができないのです。そのため、リージョンコードが2以外のものについては記述があった方が良いでしょう。

8) 言語コードについて

映像資料と言えば、広東語や台湾語、上海語の言語コードが無いのが不思議です。特に、広東語を用いている香港は映画産業が盛んで日本にもたくさん輸入されています。その言語コードとして北京語と同じchiを記入する事に、なかなか慣れる事ができません。

以上、目録を採りながら、また自分が利用者として資料を探す場合に、あったら良いのに、と思う項目を挙げてみました。

IAAL事務局：K生

IAAL 大学図書館業務 実務能力認定試験 (IAAL 認定試験)

次回
開催予定

2012年 5月 27日 (日)

- ▶ 「総合目録一図書初級」 第5回
- ▶ 「総合目録一雑誌初級」 第5回

- ① 東京会場 (機械振興会館)
- ② 大阪会場 (公益社団法人 国民會館)

詳細はホームページをご確認ください。

2012秋
新科目
登場!

2012年 11月 4日 (日)

- ▶ **NEW** 「情報サービス-文献提供」 第1回
- ▶ 「総合目録一図書初級」 第6回

- ① 東京会場 (機械振興会館)
- ② 大阪会場 (公益社団法人 国民會館)

これまでの、目録業務に関する科目に加え、2012年秋季から「情報サービス-文献提供」を開始します。

この試験では、大学図書館利用者が求める文献に関する情報を把握し、的確に提供する能力があることを認定します。試験の概要はホームページに掲載する予定です。



> COVER story



2012年5月1日に明治大学和泉図書館が新しくなりオープンします。

IAAL 大学図書館業務 実務能力認定試験 問題集

2012年版

4月中旬刊行予定

図書初級、雑誌初級の模擬問題
100題とその解説。

受験の準備に、そして目録の学習
教材としてお役立てください。ま
た、認定試験合格者の評価基準
としてご参照ください。